



**新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く
日本人の育成を目指す小学校教育の推進**

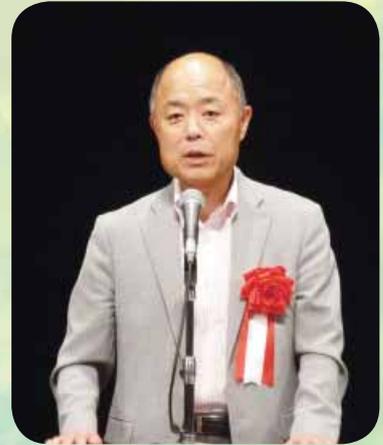
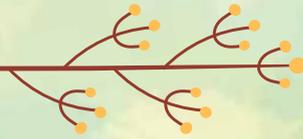
～豊かな心と確かな学力を身につけ
夢と希望に向けて共に生きる子供の育成～

研究紀要 No. 46 (2018)



福井県小学校長会

全体会



分科会



目 次

挨拶	福井県小学校校長会会長	井上政夫	5
祝辞	福井県教育委員会教育長	東村健治	7
	越前市長	奈良俊幸	9
◎大会要旨			
大会主題・大会趣旨			11
大会日程			12
分科会概要			13
◎分科会主題別研究			
第1分科会 提案者	南越前町立河野小学校	齋藤為之	16
第2分科会 提案者	敦賀市立杵見小学校	寺腰 聡	18
第3分科会 提案者	鯖江市豊小学校	窪田光世	20
第4分科会 提案者	福井市清水北小学校	大崎ふみ代	22
第5分科会 提案者	あわら市細呂木小学校	川端新治	24
第6分科会 提案者	小浜市立内外海小学校	音頭伸哉	26
第7分科会 提案者	福井市長橋小学校	原 稔	28
第8分科会 提案者	大野市乾側小学校	大塚俊浩	30
◎福井県小学校長教育研究大会主題・副主題一覧表			32
◎あ と が き			
福井県小学校長教育研究委員長	越前市北日野小学校	品川 満	34



挨拶

福井県小学校長会

会長 井上 政夫

皆さん、こんにちは。

今日もそうですけれども、今年の夏は記録的な猛暑に襲われています。雪、雨、風だけでなく、太陽までもが災害の対象と考えなければならない新しい時代に入ったのかもかもしれません。

本日、第70回福井県小学校長教育研究南越大会の大会主題は、「新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」。副主題は「豊かな心と確かな学力を身につけ夢と希望に向けて共に生きる子供の育成」の下、「女性が輝くものづくりのまち、子育て・教育環境日本一の越前市」において、このように盛大に開催することができたことは、池田町と南越前町の温かいご支援とご協力の賜物と受け取っています。会員を代表して深く感謝申し上げます。

本日は公務ご多用の中を、福井県教育委員会教育長の東村健治様、越前市長の奈良俊幸様をはじめ、多くのご来賓の方々にご臨席を賜りましたことを、心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、福井しあわせ元気国体と福井しあわせ元気大会の開催まで、あと38日となりました。大会のスローガンである「織りなそう 力と技の美しさ」は、本県の教育にも通じる言葉だと考えています。福井県小学校長会の会員数は、191名です。全国では、下から8番目という大変に小さな会です。しかし、学力と体力はトップクラスを長年にわたって維持してきました。これは、校長先生方が、担任の時代から縦糸になったり、横糸になったり、まさに織りなすように教育に尽力してきた証しだと私は確信しています。福井しあわせ元気国体と障害者スポーツ大会を通して、本県の素晴らしい子どもたちの姿を発信していただければと願っています。

話は変わりますが、皆さまはこの冊子が何か分かりますか。これは毎年、校長会調査研究委員会がまとめている研究報告書です。これは昨年のもので、この中で、自分たちの学校で研修すべき課題は何かという問いがあります。その問いに対して、「変化への対応と特色ある教育課程の構成である」と答えられた校長先生方が、67パーセントいらっしゃいました。これは全国値よりも、10ポイント以上も上回っていました。小学校英語

の教科化や特別の教科、道徳の充実についても全国値を大きく上回っていました。校長先生方が真摯な精神を持って、学校経営に取り組んでいることがよく分かりました。課題としては全国と同じ傾向で、児童と向き合う時間の確保のための改善工夫が挙げられていました。本日は、このような成果と課題を念頭に置き、8つの分科会で研究課題に迫る協議をお願いしたいと思います。忌憚のない意見交換をお願いします。小学校長が一堂に会して、これまでの研究実績を引き継ぎながら、このような研修を継続して行っていることが、校長としての力量を高めていくことにつながっていくと考えています。本日の提案を準備していただきました各校長先生方、本当にありがとうございます。

最後に本研究大会に向けて開催までの計画や準備など、今日の大会運営にご尽力いただきました南越地区の校長先生方をはじめ、多くの関係各位に心からのお礼を申し上げ、開会のご挨拶といたします。





祝 辞

福井県教育委員会
教育長 東村 健治

皆さん、こんにちは。

日頃から本県教育の充実と発展にご尽力をいただき、誠にありがとうございます。都道府県の幸福度ランキングが発表されていますが、福井県は3回連続の総合1位獲得を果たしています。これに大きく寄与しているのが教育の分野です。

先ほども井上会長からありましたが、学力・学習状況調査においても、平成19年度以来、トップレベルをずっと維持しています。これは校長先生方をはじめ、先生方の頑張りに感謝するところです。ただし、今年の国語の問題を見ていると、少し状況が変わってきているのかと思います。小学校の国語Bで、「するめと一緒に混ぜたあえ物」についての問題が出てきました。この正答率が低かったです。問題文の中に、虫歯を防ぐ効果に着目してというところがあり、それを見落とすと、なかなか正解に結び付かないというものです。実社会においても、注意する力や、見直して確認する力というのは、これからの人生の中でも必要な力です。これを身に付けさせることも一つ重要であると思いました。AIに対応できる人間の能力も、こういう力だと思います。

本県の教育としては、SASAや高校入試においても考える力、基礎基本の知識、技能の習得を目指しているわけです。もう一つは、非認知能力というものでしょうか。目標に向かって頑張る力、人とうまく関わる力、感情をコントロールする力の習得というのは、本来は子どもたちが自分の生活の中や、家庭で身に付けるべき力ですが、昨今では学校に求められるようになってきているという事実もあるわけです。

この他には、体力テストです。去年は、小学校と中学校の男女とも全て1位でした。小学校と中学校においても、願わくはボール投げで、もうちょっと頑張ってくれないかと思っています。

もう一つは、英語です。平成29年度英語教育実施調査においては、中学校3年生と高校3年生、および中学校と高校の英語教員の実用英語技能検定取得率が全て1位です。何を取っても全国レベルの最上位にあるということですので、先生方のご努力に敬意を表するところです。本年度からは、小学校の英語の教科化が先行実施されています。全ての児童が均質で、質の高い授業が受けられるように研修などを通して、先生方の授業力

の向上を支援してまいりたいと考えています。1学期には、勝山市と福井市の小学校の英語授業を見せていただきました。担任が行う英語の授業の良さが、非常によく出ていたと感じました。児童をよく理解して、それぞれ子どもの能力を理解しながら英語を進めていらっしゃるという素晴らしい授業を見させていただきました。ちょうど勝山市の授業では、自由民主党の教育再生実行本部の遠藤元副大臣も一緒にご覧いただきました。遠藤元大臣は、本当に感服されていました。福井のやり方が全国に定着すればいいと意を強くして帰られました。

耳触りのいいことばかりを申し上げるわけにもいきませんので1点だけ、申し上げます。国立教育政策研究所の千々布先生は、授業の改善では、秋田が一步リードしていると常におっしゃいます。福井は何かというと、学校経営であり、校長先生に非常に頑張っていたいただいています。

あとは、不登校です。いろいろな活動によって少し減ってきて、平成24年度に最小となりました。そこから年々、増加してきています。10月に福井県不登校対策指針の改訂版を全小学校の教員に配付しますので、子どもへの意識調査とともに、教職員全体で学校の取組みについての点検や見直しを行って、ぜひとも不登校を減らしていただきたいと思っています。

また、先生の多忙化もいわれています。各学校においては、先生方の勤務状況をしっかりと把握していただくとともに、業務の平準化を図り、長時間勤務の縮減にも努めていただきたいと思います。

これからも保護者や地域から信頼される学校づくりに、いっそう取り組んでいただきたいです。校長先生のマネジメント力に期待をしています。また、福井しあわせ元気国体が9月29日から開会しますが、先行競技は9月9日から始まります。50年に1回の機会です。子どもたちの思い出に残るように、いろいろな形での参加をお願いします。

皆様方のますますのご健勝と、本大会が実りあるものになることをご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくをお願いします。





祝 辞

越前市長 奈良 俊 幸

皆さん、こんにちは。

第70回の記念すべき福井県小学校長教育研究南越大会が、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。また、会長の井上校長先生をはじめ、ご出席の校長先生方には各小学校で教育振興の先頭に立って、ご尽力をいただいていることに深く敬意と謝意を表する次第です。

福井県で50年ぶりの国体開会まで、いよいよ38日と迫ってまいりました。昨日は、天皇皇后両陛下のご来県の日程が発表されました。大変ありがたいことに両陛下には、越前市の武生中央公園総合体育館のフェンシング競技をご覧いただくことになりました。

私どもは、昨年8月に新しい体育館ならびに、だるまちゃん広場の整備をし、武生中央公園一帯の一新をしました。文化センターの西側にあるのが、だるまちゃん広場です。こちらのほうは、両陛下とも親交のありました、越前市出身の絵本作家である加古里子先生の監修で整備を行いました。残念ながら先生は、今年の5月に92歳でお亡くなりになりましたけれども、教育にも大変に関心を寄せておられました。

この公園の整備にあたり、子どもたちが創造力や探求心を育み、自ら判断できる子に成長してほしいと願われて、いろいろとアドバイスをいただきました。例えば、『『からすのパンやさん』のかざぐるま塔』という、一番のシンボルとなる大型遊具があります。こちらは途中に「ゾウの目線」や「キリンの目線」というような表示があり、子どもたちが高い塔に上っていく途中で、動物の大きさというものを実感できる表記がなされています。また、滑り台には1秒間で、一番速い人間はこの辺りまで走ってこられる、カンガルーだともっと先に進むという速さの表示が書いてあります。

直径20メートルの平面噴水もあります。こちらのほうは、加古先生の『宇宙』という絵本が題材となっており、太陽系を再現しています。真ん中の赤い所が太陽で、水星、金星、地球、火星と順番に並んでいます。当然のことながら、太陽はすごく大きいです。地球はピンポン玉ぐらいしかありません。一方で、土星や木星はバスケットボールより大きいですか。それぐらいの大きさがあります。これらが順番に、大きさも再現をされて表示がされています。子どもたちが水遊びをしながら、太陽系についても関心を持ってもら

おうという工夫であります。

この他に、加古先生の『かわ』という絵本が題材のせせらぎがあり、上流の所の床石には大きな岩が配置をしてあって、下流のほうは小さい石になっています。こちらは、水の流れによって岩が小さい石になっていくことが再現されています。至る所に、子どもたちに考える力を身に付けてもらい、創造力や探求心を磨いてもらって、自ら判断できる子になってほしいという工夫がされています。

一番ありがたかったのは、加古先生が描かれた、文化センターの壁面の横 34 メートル、高さ 5 メートルの壁画です。この後に体育館や勤労青少年ホームに移動される先生方は、途中で後ろを振り返っていただきますと、この文化センターの西側の壁面にあります。加古先生の 2 隊のキャラクターが行進をしています、反対方向に 2 隊が進んでいます。なぜかという、ちょうど体育館の辺りから見ると、北側の 1 隊は武生のシンボルの村国山に登っていくという借景です。南側の 1 隊は、丹南地域のシンボルである越前富士の日野山に向かって登っていく構図になっています。

身近な村国山や日野山から挑戦をして、やがては富士山やチョモランマという、日本一・世界一の山の頂を目指して挑戦を続けてほしいという、越前市の子どもたちに対するエールを描いていただいています。公園の整備にあたって、こちらの借景を十分に考え、加古先生が描かれたものであります。本日はお忙しいスケジュールかもしれませんが、この建物の西側のほうに回っていただいて、加古先生の絵をご覧ください、公園の中に施されている工夫について、ぜひともご覧をいただければ誠に幸いです。

加古先生が、子どもたちに自ら判断できる子に育ててほしいとなぜ願われたかという、実は戦争です。加古先生は大正 15 年の生まれで、ちょうど青春時代が戦争真っ盛りの時期でした。軍国少年で、パイロットになりたかったそうです。ところが昭和 20 年 8 月 15 日をもって、大人たちが言っていることが 180 度変わってしまいました。それに大変な不信感を持たれそうです。なぜ日本は道を誤ってしまったのかと随分考えられて、日本の再建のために一番必要なことは、子どもたちが世の中の大きな流れに惑わされず、自分で判断できて、きちんと物事の善悪が分かる子どもに育つことだとお考えになったそうです。そこで児童文学や絵本の作家になることを決意され、これまで 600 点余りの作品を描いてこられました。

先生方も恐らくご覧になっただろうと思いますけれど、加古先生の作品はどの本もものすごく細かい描写や、科学的な知見に裏付けられた解説が付いています。全てが子どもたちに好奇心や探求心を育んでもらって、自ら判断できる子に育ててほしいという熱い思いからであります。越前市は、このような加古先生の思いを引き継いで、これからも校長先生方のご協力をいただきながら、自ら判断できる子どもたちを育てていきたいと思っています。

先生方のますますのご健勝とご活躍をお祈りし、また本南越大会のご成功を祈念申し上げて、心からのお祝いのご挨拶とさせていただきます。誠にご盛会おめでとうございます。

平成30年度

第70回 福井県小学校長教育研究南越大会

1 大会主題

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進

— 豊かな心と確かな学力を身につけ夢と希望に向けて共に生きる子供の育成 —

2 大会趣旨

今日、知識基盤社会化やグローバル化が進む中、様々な社会的要因が絡み合い、困難な社会的問題や現象が出現している。これらは、教育の分野にも大きな影響を与え、既成の知識体系の枠を超えた新しい知のパラダイムが求められている。即ち、自ら考え主体的に判断する力、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて、新しい知や価値を創造する能力が必要とされているのである。

このような状況を踏まえたとき、小学校教育においては、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが責務となる。

そして、真に豊かな社会を築くためには、「主体的に生きる力」と「他者と共に生きる力」の両輪が不可欠である。つまり、一人一人が豊かな知性と感性に裏打ちされた人間性を育みながら、自己実現を目指すことと、地球的規模の視野や人とのつながりを大切にした生き方を確立することが求められる。

今後、私たちには、自己の確立とともに、国を越えて共に生きることが、ますます強く求められると考える。このような時代にあっては、私たち一人一人が、様々な情報に振り回されることなく、粘り強く相互に理解し合い、共に生きることができると探っていくことが、極めて大切となる。特に、次代を担う子供たちには、情報を正しく読み取り判断する力、問題を発見し解決する力、他者と円滑にコミュニケーションする力など、「自立と共生」の力が求められている。

そのためには、まずは、子供たちに「夢と希望」を育むことが必要だと考える。「夢と希望」があつてこそ、子供たちは学ぶことの意味を見出し、未来を切り拓くために努力することができるからである。

特に、人間形成の基礎を培う小学校教育においては、子供一人一人が目標を明確にし、互いに切磋琢磨しながら学び、自ら考え、身につけた知識・知恵を発揮して新しい知を創造し、人間性豊かな未来社会に向かって、夢や希望を現実のものにする力（実現力）を育むことが重要である。

そこで、副主題に「豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成」を掲げ、下記の8分科会において、校長の役割を究明していく。

- | |
|--|
| (1) 学校経営 (2) 教育課程Ⅰ (3) 教育課程Ⅱ (4) 現職教育
(5) 危機管理 (6) 社会形成能力 (7) 自立と共生 (8) 連携・接続 |
|--|

3 主 催 福井県小学校長会

4 後 援 福井県教育委員会
越前市 池田町 南越前町
越前市教育委員会 池田町教育委員会 南越前町教育委員会

5 日 時 平成30年8月22日(水) 13時30分 開会

6 会 場 越前市文化センター 越前市高瀬2丁目3-3 TEL 0778-23-5057
越前市中央図書館 越前市高瀬2丁目7-24 TEL 0778-22-0354
越前市武生勤労青少年ホーム 越前市高瀬2丁目9-32 TEL 0778-24-0444
越前市AW-Iスポーツアリーナ 越前市高瀬2丁目8-23 TEL 0778-22-6395

7 日 程

時 刻	12:30～ 13:00	13:00～ 13:30	13:30～ 14:00	14:00～ 14:20	14:20～ 16:10
内 容	打合せ会 〔運営委員 司会者 提案者 記録者〕	受 付	開 会 式 (全体会)	移 動	分 科 会 (閉会式)
会 場	文化センター 303号室	文化センター 玄関ホール	文化センター 大ホール	文化センター 各会議室 中央図書館 学習支援室 勤労青少年ホーム 各会議室 AW-Iスポーツアリーナ 会議室	

8 開会式

- (1) 国歌斉唱
- (2) 新福井県民歌斉唱
- (3) 挨拶 福井県小学校長会 会長 井上政夫
- (4) 来賓祝辞 福井県教育委員会 教育長 東村健治様
越前市長 奈良俊幸様
- (5) 来賓紹介

9 分科会

(1) 研究領域・研究課題・研究の視点・会場

分科会	研究課題	研究の視点	会場
第1分科会 学校経営	創意と活力に満ちた学校経営	(1) 将来を見据えた明確な学校経営ビジョン (2) 学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある運営組織の構築 (3) 学校教育の充実を図る評価・改善の推進	文化センター 小ホール
第2分科会 教育課程Ⅰ	知性・創造性を育む教育課程	(1) 確かな学力を育む教育課程のマネジメント (2) しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程のマネジメント	文化センター 201号室
第3分科会 教育課程Ⅱ	豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程	(1) 豊かな心を育成する教育課程のマネジメント (2) 健やかな体を育む教育課程のマネジメント	文化センター 202号室
第4分科会 現職教育	学校の教育力を高める研究・研修とミドルリーダーの育成	(1) 教員の意識改革を促し、資質・能力の向上を図る研究・研修の推進 (2) 確かな展望と豊かな人間性を持ち行動できるミドルリーダーの育成	文化センター 301号室
第5分科会 危機管理	子どもを取り巻く様々な危機への対応	(1) 自らの命を守る安全教育の推進 (2) いじめや不登校などを生まない学校づくりと危機管理システムの構築	中央図書館 学習支援室
第6分科会 社会形成能力	社会形成能力を育む教育の推進	(1) 社会に参画する力・態度の育成を目指す教育活動の創造 (2) 豊かな未来の実現に貢献する力を育むキャリア教育の推進	勤労青少年ホーム 集会室(2F)
第7分科会 自立と共生	自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進	(1) 子どもの自立を図る特別支援教育の推進 (2) 「持続可能な社会」を目指した環境教育等の推進	勤労青少年ホーム 軽運動場(3F)
第8分科会 連携・接続	家庭・地域・異校種等との連携・接続の推進	(1) 家庭・地域等と連携し、課題の解決に向けて取り組む学校づくりの推進 (2) 異校種間の連携と円滑な接続を図るための組織的な取組の推進	AW-I スポーツアリーナ 大会議室

(2) 司会者・提案者・記録者・運営委員（敬称略）

分科会	研究領域	司会者	提案者	記録者	運営委員
1	学校経営	南条小学校 北畑 一浩	河野小学校 齋藤 為之	今庄小学校 窪田 寛	神山小学校 奥山 勉
2	教育課程Ⅰ	敦賀北小学校 前川 博	沓見小学校 寺腰 聡	美浜東小学校 木子 雅之	武生西小学校 松澤 紳
3	教育課程Ⅱ	河和田小学校 吉村 慎一	豊小学校 窪田 光世	片上小学校 駒野 修治	吉野小学校 佐々木啓子
4	現職教育	一乗小学校 栞島 弘行	清水北小学校 大崎ふみ代	下宇坂小学校 五十嵐隆美	王子保小学校 吉田 宏之
5	危機管理	金津東小学校 八木 裕之	細呂木小学校 川端 新治	金津小学校 志田 聖一	大虫小学校 山本 英一
6	社会形成能力	小浜小学校 岡本 武	内外海小学校 音頭 伸哉	宮川小学校 前田 良則	岡本小学校 真柄 二郎
7	自立と共生	六条小学校 澤田 佳久	長橋小学校 原 稔	越廼小学校 菅野 博	服間小学校 見延 幸英
8	連携・接続	阪谷小学校 末永 巖	乾側小学校 大塚 俊浩	小山小学校 前田満里子	池田小学校 山本真由美



分科会主题别研究



第1分科会 — 学校経営 —

研究課題

創意と活力に満ちた学校経営

研究発表題

スクールプランの具現化に向けた校長の学校マネジメントとリーダーシップ

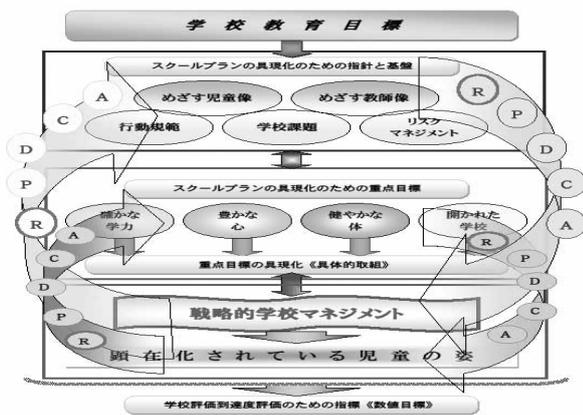
南越前町立河野小学校長 齋藤 為之

I 研究の視点

スクールプランを柱として、P D C Aマネジメントサイクルに基づき、学校経営を展開する計画性・戦略性が、活力ある学校づくりに不可欠である。一方、学校教育は、スクールプランに示される重点項目・重点目標・具体的取組の達成だけに収まらない力動的でダイナミックな面を有する。学校経営において、スクールプランの具現化を果たすためには、現在顕在化されている児童の姿をキャッチし、「スクールプランの具現化のための指針と基盤」と、「スクールプランの具現化のための重点目標」の二つのディメンション（様相）への働きかけが必要ではないかという問題意識のもと、研究発表題に迫るために「仮説的学校マネジメント構造図」を機軸として研究を深めてきた。

II 研究の概要

スクールプランの具現化に向けた仮説的学校マネジメント構造図



(1) スクールプランの具現化のための指針と基盤形成

- ①めざす教師像の具現化を図る取組
 - ・「スクールコンプライアンス」研修
 - ・肯定的評価や賞賛による資質向上の試み
- ②児童の行動規範を重点化した取組
- ③教職員のリスクマネジメントの意識高揚を図る具体
- ④学校課題を焦点化し、課題解決に向けた取組

(2) 「顕在化されている児童の姿」を踏まえた「戦略的学校マネジメント」の概要

① 「確かな学力」育成に向けての取組

- ・家庭学習モデル「河野小 学びのスタンダード」
- ・スキルタイムの取組
- ・カリキュラムマネジメントの実践

② 「豊かな心」育成に向けての取組

- ・道徳科の授業実践
- ・行動規範の取組

③ 「健やかな体」育成に向けての取組

- ・家庭との連携による基本的な生活習慣の形成
- ・健康教育の推進

④ 「開かれた学校」に向けての取組

- ・親子道徳「命の授業」実践
- ・「雲龍丸」操舵体験 村田製作所の特別授業

III まとめ

・「スクールプランの具現化のための指針と基盤」と、「スクールプランの具現化のための重点目標」の二つのディメンション（様相）への働きかけについて、前者に関しては管理職によるマネジメントによって、後者は、各部会への管理職による働きかけと各部会長のリーダーシップの相互作用によって、スクールプランの具現化に向けた、教職員の学校経営参画意識が高まってきたと考える。

・P D C Aマネジメントサイクルの基底をなす「R」（調査・分析）を重要視することにより、顕在化されている児童の姿に対する教職員間のコミュニケーションが活発化され、児童の実態に即した効果的な方策を講じることができると考える。

・本研究を通して、個々の教員の将来を期待し、学び続ける教員および教員集団の育成に向けた校長による不断の働きかけとその評価の重要性を再認識した。

○参考文献

- ・「学校組織マネジメント研修（モデルカリキュラム）」H17 文部科学省

◎研究協議内容

齊藤 だしじゃこ作りと販売の体験は良い取り組みである。販売に関して食品衛生上の問題は無いのか。

発表者 保健所にすべて許可を得ている。

齊藤 どのような許可を得ているのか教えてほしい。

発表者 生ではなく乾燥したものであるため、販売する際の表示方法について指導を受け、それに従って行っている。

齊藤 事前に、保健所にだしじゃこ作りの活動内容について申請して許可が得られたのか。

発表者 生ではなく乾物のような加工品であれば、申請すれば許可が得られる。

齊藤 販売で得た収益はどのように使っているのか。

発表者 消費者教育の一環として、どのように収益を使っていくかについても話し合いをした。そして、お世話になった方々に感謝のパーティーを開くことにした。残金については、使い道を決められずに繰り越されている。

齊藤 だしじゃこを作り、販売した収益で感謝のパーティーを開くということは、活動の目的として妥当かどうか疑問である。

発表者 この活動は、無償で材料の提供を受け、関係者はボランティアで支援や協力をしてくれて成り立っている。活動を通して児童は達成感を味わっている。感謝の気持ちを伝える良い機会であると捉えている。

道関 発表の中で、CATV（ケーブルテレビ）の映像が使われていた。学校の教育活動を発信していく上で、CATVも含めてマスコミの活用は有効であるが、思い通りに取材に応じてくれないところもある。

発表者 地域に密着したCATVであるために、学校から要望すれば取材に応じてくれることが多い。そして、スポットニュースとして、また、スクールタイムといった特集番組として、地域に活動の様子が紹介される機会となっている。新聞記事やテレビ番組として活動を取り上げてもらえるように、日頃から記者や担当者と良好な人間関係をつくるように心がけている。

◎グループ協議内容

A・スクールプランの作成に当たって、重点目標は校長として示し、具体的取組は部会等で担当者が決めるようにしている。前年度の学校評価の結果を基に新年度に練り上げる。職員が練り上げていくようにすると会議が増えるという弊害も出てくる。

・担当学年だけでなく、他学年や学校全体に目を向けられるような教職員が減ってきている。
・リーダーシップとトップダウンは異なる。リーダーシップは教職員の思いを引き出す力である。教頭や教務主任と共通理解を図るだけでなく、主任以外の教職員にも声をかけ、対話する機会を設けている。リーダーシップを支えるものとして、校長への信頼感が大切である。

B・体験活動を進めていく時には、児童につけたい力を明らかにしたり、スクールプランと関連づけたりして、見直していくことも必要である。地域とのつながりも大切であるため、簡単にやめることもできない。

C・日頃のコミュニケーションを大切にして、校長と教頭の役割を明確にする。

・個々の教職員とコミュニケーションをとることは必要であるが、教務主任などの主任や中堅教員の位置づけをして、小規模でも組織づくりを大切にしている。

D・スクールプランは部会で検討して、教職員の考えを吸い上げて作り上げる。全員で共通理解をしてスムーズに運営されている。

・年度初めは、担任には学級開きをしっかり行ってほしい。スクールプラン作成のために担任の時間を縛らないようにしている。



(文責：南越前町立今庄小学校 窪田 寛)

第2分科会 — 教育課程 I —

研究課題

知性・創造性を育む教育課程

研究発表題

保・幼、小、中、高校を見通した、知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

敦賀市立沓見小学校長 寺 腰 聡

I 研究の視点

敦賀市では、「敦賀市『知・徳・体』充実プラン」を作成し、「人とのつながりの中で学びを深める」ことをめざし、その柱の1つとして「保・幼、小、中学校の連携」を推進している。

そこで、敦賀市校長会では、市内4中学校ブロックの1つである粟野中学校区(中学校1, 小学校4)での活動や、粟野小学校独自の活動の中から、知性、創造性の育成という側面から見た取組について述べたい。

II 研究の概要

(1) 地域との連携

① 地域と進める体験推進事業

- ア 地域の取組の継承や発展に貢献する体制づくりと永続的に地域と一体となった教育活動
- イ 各校が取り組んできたふるさと学習や地域に既存する団体との連携を視野に入れた活動

② 各小学校の事業企画

- ア 粟野小学校：地域の伝統芸能「柴田音頭」の太鼓、踊りの継承と発信
- イ 粟野南小学校：芥川龍之介「芋粥」の舞台となった地域性を生かした取組(芋粥のルーツ調査や芋スイーツの創作)と発信
- ウ 黒河小学校：地域の特産野菜(黒河真菜)の栽培と発信
- エ 中央小学校：笹の川の水質検査、二夜の川の鯉

③ 地域との連携による「挨拶運動」の推進

- ア 標語募集とポスター、看板づくり
- イ 朝の挨拶運動

(2) 小中一貫教育<中学校ブロックでの小中連携>

① 敦賀市小中一貫教育

- ア 「小中接続」: 「中1ギャップ解消」に向けた小中の相互交流や授業体験、部活動見学
- イ 「小中一貫カリキュラム」: 小中学校9年間の学習の流れを効率的かつ効果的に進める目的としての作成

② 粟野中学校ブロックの取組

- ア 生徒指導面での連携: スマホールの作成
 - イ 外国語活動での連携: 英語スキルの充実
- #### (3) キャリア教育(視野を広げる)
- ① 「ユーチューバーになりたい」からの脱却
 - ア 実態を知らない職に就こうと考える不確実性
 - イ 楽しいからという安易な発想
 - ウ コミュニケーションや人との交わりの不足
 - ② 「多くの大人の中で育てる」
 - ア 修学旅行での、工場や専門学校訪問
 - イ 「スポーツ選手」に関わる講演
 - ウ 「声優」を招いての講演会
 - エ 日立製作所による「未来につながる情報技術」
 - オ 特別養護老人ホームや保育園への定期的な訪問活動

III まとめ

(1) 成果

- ① 校区の幼保、中学校へ依頼に校長自身が出向くことで、状況把握や問題意識の共有が図られた。
また、地域との連携を深めることで、家庭、地域からの信頼も高まった。
- ② 英語教育や生徒指導で校区の共通理解が図られ、児童の中学校へ進学する不安が少なくなった。
教職員の縦・横の連携も深まり協働的な指導ができた。
- ③ 子供たちが「働く」ことの魅力に気づき、将来の目標や夢を持つことができた。

(2) 課題

- ① 小中一貫教育の取組を共有し、学校間のつながりをより強くすることで、学力の向上、いじめ・不登校減少、さらに効果的かつ魅力的な授業づくりにつなげていく。
- ② 人とのつながり、学校間のつながりをさらに深め、知・徳・体を充実し、未来を担う子どもを家庭・地域・学校と人とのつながりで育てていく。

◎研究協議内容

山口 地域と進める体験推進事業では、次代を担う子どもたちに、どんな力をつけたいと考えられたのか。また、英語活動では、中学校区の卒業児童の英語スキルを揃えたいとのことだが、どんな力に揃えたいのか、そのレベルの根拠はどこにあるのか。

荒木 同じように、研究の視点での「知性」と「創造性」の定義、キャリア教育における「子どもたちに求められる力」等の根拠、出所・出典も明確にしておく必要があるのではないかと。

発表者 地域と進める体験事業においては、地域との連携の中で、あいさつがしっかりできる児童の育成をめざしている。英語については、小学校のうちに英語嫌いな児童をつくってしまわないこと、子どもたちの英語に対する興味をしっかりと保って、中学校に送り出すことに基準を置いている。キャリア教育については起業家教育の考え方に基づいている。

小鍛冶 キャリア教育の大切さは十分理解できるが、テーマとの関連が弱いように思う。小中一貫カリキュラムについて、もう少し詳しく聞きたい。

発表者 市内の教科研究員が中学校の学調の結果を分析し、ポイントとなる中学校での内容につながる事項を小学校のどの学年で扱っているかを明らかにし、小学校での指導に役立てている。

荒木 発表内容は、研究課題、研究発表題から予想したものとは違っていた。研究発表題を変えたほうが良いのではないかと。

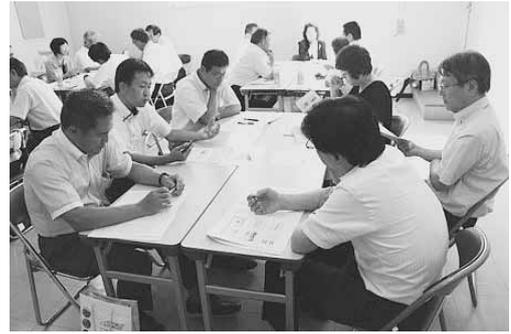
山口 大変多くの素晴らしい実践を重ねておられるが、ビルド・ビルド・ビルドでは、近頃の業務改善の流れとはかけ離れていくように感じる。そこで校長のマネジメントはどう生かされているのか。

荒木 その所の所を丁寧に発表してもらえばいいのではないかと。

発表者 小中一貫教育を例にとれば、方向性は教委が出しているが、校長同士が小中を見通し、業務改善も頭に置いて、柱となる枠組を話し合い、共通理解のもと実践に移している。

◎グループ協議内容

○校長のリーダー性・指導性について



・地域と進める体験推進事業において、校長が地域の特色を柱にして進めていくという方向性を示し、発展していく中での関係者との交渉も校長・教頭が主導した。

・地域の祭りを、児童が自分たちの祭りと感じることができるように、山車づくりに参加させた。

など、校長が方向性、ゴールを見通して、指導性を発揮することが大切である。

○小中一貫教育（小中一貫校）について

授業での取組は小中教員の交流による教科担任制がメインになる。教員の出入りは多くなるが、子どもたちがいろいろな教員の指導を受けることができる、教員がたくさんのクラス、児童とかかわることができるなどの良い点がある。

○確かな学力を育む教育課程のマネジメントについて

・小中連携をマネジメントに生かす。地区の特色、小中の特性を生かしてカリキュラムを作成していきたい。

・社会に開かれたカリキュラム・マネジメントは難しいが、保・幼・小連携、小小連携、小中連携も一つの方法と考えられる。

○地域との連携について

・朝、子どもたちを地域まで出迎える取組を始めた。それが学校教職員、地域の方へと協力の輪が広がった。

・地域と合同の畑作について。打合せは、校長・教頭である。

・昨年からは地域を知ろうという方向性で事業を進めた。地域に子どもが出ていくことも大切にしたい。

など、まず校長が動く、地域の中に入っていくことを大切にしたい。

（文責：美浜町立美浜東小学校 木子雅之）

研究課題

豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程

研究発表題

健康な心身の育成を目指す食育の推進と校長の役割

鯖江市豊小学校長 窪田光世

Ⅰ 研究の視点

鯖江市では、食育を基盤とし、生きる力を育む学校教育を推進してきた。市の「教育の振興に関する政策の大綱」では、食育を通して、健康な心身の育成や伝統的な食文化の継承を図るとともに、食の恵みに対する感謝の心や「食と環境」「地産地消」など社会的課題に向き合う心を育てることをうたっている。市内12校では、それぞれに特色をもった食育に取り組んできた。

ここでは、校長のリーダーシップとして次の4つの視点を軸に、これまでの取組をまとめる。

- (1) スクールプランへの位置づけ
- (2) 食に関する指導カリキュラムの工夫
- (3) 地域や行政との連携
- (4) 家庭や地域への情報発信、啓発

Ⅱ 研究の概要

- (1) スクールプランへの位置づけ

「食育が健全な人格形成の基盤である」という市の方針をふまえ、それぞれの学校の実態に合わせ、スクールプランの中に「食育」を位置づけた。実践にあたっては、全ての教職員が食育の意義やそれぞれの活動の目標等を共有し、同一歩調で取り組めるよう、働きかけたり研修したりした。

- (2) 食に関する指導カリキュラムの工夫

学校と行政、地域が連携して行う様々な食体験も含め、栄養教諭を中心として食育カリキュラムが作成されている。今回、より効果的、効率的な教育活動となるよう次の4つの観点からカリキュラムの見直しをはかった。

- ①食育を通じた健康な心身の育成を目指す
 - ・食育アンケート等を生かした指導
 - ・毎日の給食時の食育計画
- ②伝統的な食文化の継承を目指す
 - ・うま味の授業（だし）

・伝承料理体験

・越前漆器を使った給食

- ③食の恵みに対する感謝の心の育成を目指す

・野菜や米の栽培、収穫体験

・魚のさばき方教室

・ありがとう集会、招待給食等

- ④社会的課題に向き合う心の育成を目指す

・地場産食材による学校給食

・学校給食畑

- (3) 地域や行政との連携

食育の効果を高めるため、市農林政策課や、公民館、地域の企業、ボランティア等の協力は欠かせない。校長は年間カリキュラムに位置づけられた教育活動としてのねらい等に基づいて地域や行政と調整を行い、また地域や行政の願いを担任に伝えるコーディネーターとしての役割を果たした。

- (4) 家庭や地域への情報発信、啓発

学校での食育学習を生かして、児童自身が生活習慣を見直し、学んだことを家庭での実践にも広げていけるよう取り組んできた。より効果が上がるよう、食育だよりや学校だより、HP等に、食育に関する取組の意義や実際の様子などについて掲載することで、家庭の食に関する意識を高めた。

Ⅲ まとめ

- (1) 成果

教職員の意識が高まり、学校教育の中で児童の心身の健康を支えるものとして食育が定着した。また地域をあげて取り組んでいる食文化の継承の重要性を意識するようになった。

- (2) 課題

特別の教科道徳とも関連させながら、食を通して児童の視野をひろげ、社会的課題に向き合う心を育てられるよう、食育推進の成果を検証し、更にカリキュラムを工夫する必要がある。

◎研究協議内容

重神 学校全体で食育をすすめる上で、栄養教諭の力が重要になってくるが、鯖江市の栄養教諭は何人いて、足りているのかどうか、配置はどうか。

発表者 栄養教諭は2名、栄養職員が2名、一人あたり3校兼務している。足りているかといわれると十分とはいえないが、給食部会と保健安全部会で協力しながら食育を推進している。常に学校にいてもらえるとよい。

重神 栄養教諭と給食部会や保健・安全部会の関係はどうか。

吉村 保健安全部会では栄養教諭がアレルギーマニュアルの作成に関わる。また、年に2回マニュアルの見直しを行っている。

駒野 給食部会では、献立作成会議や食育推進計画の立案に関わっている。栄養教諭の仕事が年々忙しくなっている。

司会者 他の市町における食育の取り組みはどうしているか。

森 小浜市は全て自校給食、食のまちづくり条例のもと食育推進を行っているが、生産者の高齢化、食材の仕入れなど、課題がたくさん出てきている。また、給食調理員の確保が難しい、自校給食は美味しいが、学校だけでは解決できないなどの問題がある。

吉村 調理員の確保は鯖江市も大変である。体調不良の場合、代替調理員が確保できない場合はメニューを変更して対応することもある。

服部 栄養教諭が兼務校に行く頻度はどうか。

発表者 2週間に1回、そして、食育に関する行事があるときに来てもらう。

服部 敦賀では月1回、そのときに食育指導をしてもらう。来校回数が増えたとよい。食育を通して、子どもたちが変わったところはあるか。

発表者 鯖江市の子どもたちは栄養や食材に関する関心が高いように感じている。給食の時間に栄養に関する話を聞いているので、バランス良く食べることが定着している。また、保護者が試食会などに参加し、学校で聞いたことを親子で話し合い実践している、子どもたちが食

に関する興味を高めている。

森 鯖江市の子どもたちの好き嫌いの状況はどうか。

発表者 好き嫌いのある子はいるが、学校での食育指導で食べられるようになってきている。また、自分たちで作った野菜を食べることで、好き嫌いも減っている。



◎グループ協議内容

Aグループ（全体への報告）

学校によって、栄養教諭の配置や食育の取り組みは様々である。学校がどこまですべきなのか、教員の意識の差や体系的な指導のあり方など、学校の抱える課題がある。食育推進に関する具体的な指導時間について、カリキュラム上の位置づけは総合の時間が多く、授業では指導案をもとに栄養教諭と担任が連携して行ったり、学校外の協力を得ながら行ったりしている。教員の意識の高め方については、食育推進活動のねらいを明確にして実施すること、スクールプランへの位置づけをすることが大切である。

B～Dグループ

伝統野菜を作って味わう環境が整っていることで、食育推進が効果的に進められている。米や野菜の栽培において、ボランティアまかせでなく本格的な体験もさせたいが、時間が生み出せない。栄養教諭と連携し食育指導はできているが、推進していくうえで配置人数を増やしてほしい。学校畑で児童が育てた野菜を、近くの温泉施設で販売し、食育活動の情報発信をしている。アンケートや試食会を通して保護者と連携を進め、食育を推進している。校区に畑・海・湖があるので、地域に合わせた食育に取り組んでいる。

（文責：鯖江市片上小学校 駒野修治）

第4分科会 — 現職教育 —

研究課題

学校の教育力を高める研究・研修の推進とミドルリーダーの育成

研究発表題

若手中心の教員集団における資質・能力の向上や人材育成と校長の役割

福井市清水北小学校長 大崎 ふみ代

I 研究の視点

教員の世代交代が年々進み、学校によっては教員の年齢構成にゆがみが生じ組織力に影響を与えている。この実態の中、学校の教育力を持続・向上させていくためには、若手教員の資質・能力の向上と、時代とともに変容してきた新たな課題に対するベテラン教員の考え方や意識の転換の双方が必要である。また、教師集団全体の調整・牽引役となるミドルリーダーを育成することも急務である。そのために、校長は、職場の同僚性や協働性を構築し、学び合いによる全体のレベルアップを図るとともに、授業力・学級経営力・学校経営参画意識等について、教員個々の課題と学校全体の課題を的確に把握し、それぞれの調和を図りながら、意図的かつ計画的に校内研究・校内研修を充実させていくことが求められる。

このような視点から、教員の意識改革を促し、資質・能力を高める校内研究・校内研修の推進とミドルリーダー育成のための、校長の果たすべき役割と指導性について研究実践を行った。

II 研究の概要

(1) 教育力を高める研究・研修の推進

担任8名中20代4名、30代前半3名、50代1名と、圧倒的に若手が多い教員集団で、本校が1校目や2校目という教員がほとんどである。経験年数が浅いことから、授業や保護者対応等について不安を抱える教員も多い。一方、50代のベテラン教員は、経験が上手く機能せずに苦しむ場面も見られた。そこで、いろいろな視点で自分の課題と向き合うことができるように、多様な機会を捉えて校内研修を行った。

① 児童理解・他者理解・学級経営

- ・小学校カウンセラーによる校内研修
- ・Q-U ・協働性・同僚性
- ・事例研究会
- ・保護者懇談会のもち方

② 授業力

- ・NIE ・ICT
- ・一人一授業 ・模擬授業
- ・教育フォーラム伝達
- ・新学習指導要領関連

③ 危機管理

- ・エピペン研修 ・AED研修
- ・土砂災害防災研修
- ・子どもの自殺防止と指導の在り方
- ・不審者対応研修

(2) ミドルリーダーの育成

研究主任、特別支援教育コーディネーターといった校務分掌上の重要ポストに若手を起用。提案を尊重しつつ適宜助言、校外研修の活用推進で意識の高揚を図った。

(3) 校長の果たすべき役割

OJTが機能するように協働体制構築に努め、課題やニーズを把握し担当の教員と相談の上、必要な研修を計画した。各教員の自主性や提案を尊重し、肯定的な指導と、ともに歩む姿勢で助言やアイデアを提供し、関係機関との橋渡しも行った。

III まとめ

(1) 成果

研修での学びをもとに各自が創造性や工夫を盛り込んで提案・活用していくことを尊重する支援型・ボトムアップ型を意識し、ミドルリーダー育成には有効だった。学校の課題に応じた研修を多様な機会を捉えて行い、基本的な考え方や授業ですぐに活用できる方法、危機管理等を共有できて有意義だったという評価も得た。

(2) 今後に向けて

若手教員が多いからこそ、ボトムアップ型だけではなく、管理職の強いリーダーシップを求める声もあり、平成30年度に向け県の「突破力育成！学校サポートプログラム」を申請した。

◎研究協議内容

大川 支援型リーダーシップについて詳しく教えていただきたい。

発表者 愛知県で取り組まれている内容であり、昨年の愛知大会で学んできた。ビジョンは校長が示し、これに対して各教諭が提案し取組を行う。この支援型リーダーシップは、一般教諭の参画意識が育つといった利点がある。

北川 若手教員が増えている中で、年間を通して先を見据えた現職教育の取組は素晴らしい。一人一授業の際の振り返りの視点を教えていただきたい。

発表者 研究主任から示された授業を振り返る視点は、①適切なリズム・テンポ、②明確な指示・発問、③温かな表情や対応、④対話的な活動の設定の4点について3段階評価。その他、気がついたことを簡単に記述し授業者に戻していく。

司会 それぞれの学校において若手教員が増えていく中で、「研究・研修の推進」「ミドルリーダーの育成」に、校長としてどのように取り組んでいるか。

出蔵 研究主任に28才の若手教員を抜擢したことは素晴らしい。立場が人を変える。これがまさに現職教育だ。

発表者 前年度の研究主任は異動をしてしまったので、意欲・情熱のある若手教員を抜擢した。校長としても頻繁に相談にのり支援をした。

千嶋 研修を通して教職員が育ち、協働性・同僚性が大切だと感じる。そこで、研修の時間をどのように確保したのか教えていただきたい。

発表者 職員会議の冒頭や終礼の前後を活用し、校長からの話や一人一授業の振り返り等を行った。極力長くならないように意識した。

◎グループ協議の内容

Aグループ（全体への報告）

- ・働き方改革が叫ばれている中、研修の時間をいかに確保するかが課題である。職員会議の後にミニ発表会、夏季休業中に研修の機会を設けている。
- ・大規模校では、ミドルリーダーの育成として、学年副主任制をとっている。
- ・ミドルリーダーの育成のために、これまで50代が担ってきたことを40代へと移行させた。また、管理職が、30代や40代の教職員に積極的に声

かけをするよう心がけている。

Bグループ

- ・模擬授業など、校内の若手が集まって自主的に研修をしている風土がある。校長も月に1回程度、積極的に研修を企画している。
- ・アレルギーの児童が在籍していることから、毎日職員朝礼を実施している。そのちょっとした時間を利用して、校長からキーワードを示し短く指示するようにしている。
- ・一人一授業の他に、ペア授業（お互いに参観する）を設けている。また、全教職員がA4・1枚程度でミニ伝達講習会を実施している。まずは校長から実施した。

Cグループ

- ・今後、新規採用教員が増える中、現職教育は重要となってくる。そこで通知表のコメントの書き方や道徳の評価についての現職教育を行った。
- ・学校の立地条件にあわせて避難訓練を実施している。原子力、大雨、大雪、不審者等。

Dグループ

- ・一人一授業が負担とならないよう様々な工夫をしている。全体参観をやめ、低中高部会で参観。また事前検討会に力を入れている。授業者は授業の観点を示し、指導案作成を軽減。その他、板書の研究、授業名人のビデオ研修を取り入れた。
- ・核となる若手教員に思い切って取り組むよう声かけをしている。
- ・若手とベテランをペアにして仕事をさせていることでよく機能している。
- ・小規模校だが、委員会やプロジェクト部会を設けることで、当事者意識や参画意識が育っていく。
- ・チームワーク、フットワーク、ネットワークを大切にするよう繰り返し声かけをしている。
- ・伝達研修を行うようにしている。英語が1コマ増えたため研修の時間を確保するのに苦慮している。



（文責：福井市下宇坂小学校 五十嵐隆美）

第5分科会 — 危機管理(危機対応) —

研究課題

子どもを取り巻く様々な危機への対応

研究発表題

いじめ・不登校を生まない未然防止のための具体的取組と校長のあり方

あわら市細呂木小学校長 川端新治

I 研究の視点

「楽しい学校づくり」を推進するという大きな目標の中で、児童自身が、直面する様々な危機を自力で乗り越えようとする際、教員の指導・支援や助言は、背中を押してくれる絶対的な力となり得る。教員は、このことの自覚の下、日々児童の「自立心」や「生活力」の向上を念頭に置いて、全力で職務を全うしなければならない。学校経営上、「いじめ・不登校問題における校長としての指導性」をいかに具現化できるかが重要なポイントと捉えている。

II 研究の概要

以下に、4つの実践事例を紹介する。

(1) 「児童・保護者教育相談活動」の充実

(学校と家庭の連携)

年間を5つの区間に分けて、いじめ調査アンケートとは別の簡単な集計を伴う相談活動として、校長発案で実施した。担任の日常的な児童観察や児童理解につながるツールとして実施を指示した。児童一人一人と適度な距離感を持ち、触れ合い、寄り添いながら、丁寧に、きめ細かく、指導・支援・助言等を進めることで安心感を与え、学校での学習や生活での充実につなげることを狙った。全児童対象で実施した。実態(困り事なしの児童数等)を経年的に追跡し、相談活動を「楽しい学校づくり」のセーフティーネットとして生かす共通理解の下、多様な支援活動や助言・指導、悩みに対する共感等に尽力してきた。保護者の声にも耳を傾けながら継続実践中である。

(2) 「家庭・地域・学校協議会からの提言」活用

(学校と家庭・地域の連携)

「読書、手伝い、ゲーム、挨拶、優しい言葉」の5つの生活観点を取り上げ実施してきた。児童自らが取組の宣言をし、長期休業中の毎日、実施の可否を自己チェック。毎年継続実施中。結果を記入した「記録表」を休み明けに担任に提出し、その年の「提言達成率」を集約。児童

の実態を示す数値材料になり、生徒指導の一つの指針としても活用できた。学校日より等で広く公開してきた。

(3) 「チャレンジ! テレビやゲームと上手につきあおう」

の実践(学校と家庭の連携)

保健部からの企画。テレビとゲームに焦点を当てて、家庭の協力を得ながら自制を促し、生じた時間で別のことに意識を向けさせようという取組。実践後は、家庭からの「報告書」を担当に提出。テレビやゲームに振り回されない生活ぶりの報告等が多数寄せられ、好評だった。

(4) 「学校行事と地域行事の融合」

(学校と地域との連携、家庭の協力)

H28年度当初の吉崎小との統合以来、両地区の融和促進行事への参加。地域内の教育資源を生かした学習(「たたら製鉄」溶出体験、「越前柿」収穫体験、「米作り」体験、その他)で、地域ボランティアの支援を受けつつ行うふるさと学習を展開。今年度から指定を受けた「地域と進める体験推進事業」も効果的に活かしたい。

III まとめ

スクールプランの実現(楽しい学校づくり)という目標をめざして、校務分掌毎の危機管理意識、教職員個々の当事者意識、校長のリーダーシップの下での「チーム学校」の実践に向けたベクトル合わせ等、整備していくことは多かったが、いじめ・不登校に関わる重大事案発生の芽は確実に事前に摘み取れてきた。

家庭や地域との強固な連携を通して、いじめ・不登校問題での危機管理(危機対応)に心強い応援団になってもらえるよう、今後も相互に密接な連携が必要と考える。昨年度から立ち上がった「あわら市未来を拓く小中交流プラン」(つながり、まなび、こころの3部会)での活動にも有機的につなげたい。児童個々の自分に自信を持たせる指導や仲間との絆作りを大切にする指導のあり方については、今後さらに追求していきたい課題である。

◎研究協議内容

山名 「児童・保護者教育相談活動」で行う児童への調査は口頭によるものなのか。また、経年比較で結果を分析するようだが、個々の児童の変化はどのように評価するのか。さらに、保護者の声はどのように拾っているのか教えてほしい。

発表者 調査は口頭で「(先生とお話しする時間をとるけど)何か困っていることはありませんか。」と、問う。相談事の有無のみを把握するために実施することから、一人が複数の相談事があったとしても「1」とカウントされる。すべての調査結果を校長が集計分析するため、児童の変化を敏感に把握することができる。そして、重要案件が見つかった場合には、担任や他の教職員に対しての適切な助言のもと、速やかな対応を指示する。保護者の声を拾う有効な手段は連絡帳である。その旨を「学校だより」で周知し、理解と協力を求めている。

新道 一年を5区分して調査期間を設定しているが、この区切りには意味があるのか。また、期間のどの時期に行くか(例:夏季休業の前と後)によって、正確な調査結果を得られないのではないか。

発表者 2学期制のスケジュールの中で、大きな行事を境に期間を設定して調査を行っている。悩みごとや困っていることの数を確認することは難しいかもしれないが、相談事を抱えている児童の有無を把握するには効果があると考えます。

新道 担任教諭が聞き取る調査なので、担任と児童との人間関係が大きく影響するように思う。

◎グループ協議内容

Aグループ(全体への報告)

- ・いじめや不登校の未然防止には「楽しい学校」「授業の充実・満足感」が第一である。定期的に「いじめアンケート」等を実施し、児童の実態を把握することで、早期対応につなげる必要がある。
- ・担任と児童や保護者との相性もある。教育相談週間に、校長だけが見るアンケート「教えてね2」を作成してポストに投函させる企画を行っている。

- ・スクールカウンセラー(S C)を有効活用し、大規模校であっても、年に一度は全ての児童とS Cとの面談を実施する。
- ・異学年交流を活用した教育活動において、思いやりを持って年下の子どもに関わったり、年上の児童が自己有用感を持ったりするなど、様々な場面でピア・サポートの理念を取り入れる。さらに、学級で起こる様々な問題について、教師の思いだけでなく、児童が主体的に自分たちの学級問題を話し合う機会を設ける。月曜1限を全学級が学活の時間として統一し、学級や学校の問題について話し合う時間を設けている学校もある。
- ・「わからない」「できない」という言葉を言えるのも主体的に取り組んでいる証拠。普段の学級経営において自分の思いを素直に表現できる雰囲気を作る必要がある。

B~Dグループ

- ・小規模校では、幼いころから人間関係が固定化されているため、一旦トラブルが発生すると、解決が難しく長引く傾向にある。いじめや不登校が命にかかわる重大事案であることを全教職員が認識し、慎重に対応する必要がある。
- ・「学校」という枠に縛られることには抵抗があるが、児童クラブ等の活動には参加できる児童がいる。学校に来るのが当たり前という考え方を見直す必要があるのかもしれない。
- ・過去のいじめやトラブルに対して、継続的な支援を行うとともに、誤った情報が独り歩きしないよう小中間の連携が大切である。



(文責:あわら市金津小学校 志田聖一)

第6分科会 — 社会形成能力 —

研究課題

社会形成能力を育む教育の推進

研究発表題

主体性や地域愛を高めるための取組や方策

小浜市立内外海小学校長 音頭 伸哉

I 研究の視点

小浜市では少子高齢化・人口減少・核家族化・地域コミュニティの弱体化などが大きな課題であり、教育活動を通じた将来の地域を担う人材育成が不可欠である。そのためには小学校時代から、地域を知り、地域に学び、地域に役立つような体験を通して、地域を愛する人間を育成していくことが肝要である。

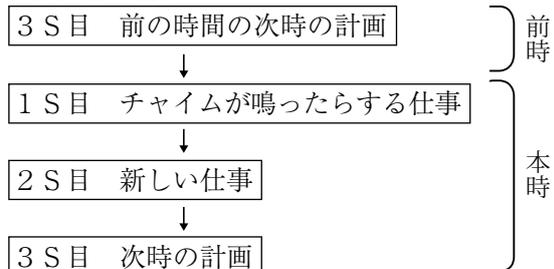
市の学校教育方針にも「郷土を愛する心や、新しい時代を生き抜く人材の育成」が謳われ、これは市の発展を図る上での基本的考えとなるものである。各校ではこれを受け、各々の地域特性に合ったふるさと教育を推進し、他方、全市をあげて「主体的、対話的で深い学び」を志向した3S(さんえす)学習を展開中である。本校でも学校教育目標を「内外海に誇りを持ち、未来へ大きな志を持つ子」とし、主体性を育む授業と地域資源を活用した体験活動を軸に教育活動を推進している。ここでは小浜市の一例として本校の取組についてその一部を紹介しながら、活動を進める上での校長の役割や責任について考えたい。

II 研究の概要

(1) 主体性を育む授業展開 ～3S学習の推進～

小浜市では主体的な学びを育む授業形態として3S(さんえす)学習を行ってきている。3Sとは3つのステップの略である。

① 3S学習の流れ



1S目は、チャイムとともに係の司会で授業を開始する。その内容は前の時間の次時の計画で予告されているのでスムーズに授業へ入ることができる。

- ② 3S学習による児童の変容や成長
 - ア 授業の見通しの把握
 - イ 既習事項と比べようとする思考の成長
 - ウ 聞く意識、繋がりを意識した発表態度の向上
 - エ 学びによる自己変容の自覚
 - オ 学びを生活に生かそうとする意識の醸成
- (2) 地域資源を活用した体験活動

地域の自然・人・産業などの資源を有効活用した体験を進め、地域のすばらしさを実感し、同時に自分自身も地域の一員であることを再認識することで地域への愛着を高める学習に取り組んでいる。

①実践例1 遠泳大会 (5・6学年)

自然資源、観光資源、人的資源を活用し、そのすばらしさを再認識させ地域への感謝の念を抱かせる。

②実践例2 「鯖のなれずし」づくり (6学年)

歴史的資源、食文化資源、人的資源に学び、地域への誇りを高める。

③実践例3 鯖街道踏破 (6学年)

歴史的資源、食文化資源に触れ、先人の努力を追体験し、地域への理解を深める。

④実践例4 奈良でのPR活動 (4・6年)

観光資源や食文化資源を地域外へ広く発信し、地域貢献を果たす。

III まとめ

- (1) 成果
 - ・児童の学習への取組姿勢向上
 - ・教師の授業力の向上
 - ・児童の地域への思いの高まり
- (2) 課題
 - ・授業時数の確保や上積み
 - ・教員の多忙化解消
 - ・教員の主体性の一層の向上
 - ・スクラップ アンド ビルド

校長は、説明責任を果たすとともに適切なカリキュラムマネジメントや組織力強化、教員との意思疎通等によりリーダーシップを発揮しながら、たゆみなく課題解決を目指さなければならない。

◎研究協議内容

増田 この取組の課題としてあげたスクラップ(説明責任、子どものためという視点、意思統一)について、もう少し詳しく教えてほしい。

発表者 地域との結びつきが強い中で、毎年実施している行事をなくしたり少なくしたりする場合には、そのことで子どもたちへのどんなメリットがあるのかを、PTA総会等で説明し理解を求めている。

増田 意思統一とはどういうことか。

発表者 保護者や地域に説明する前に、まず、職員に対して意思統一を図っておくことが重要である。

増田 子どものためにという視点に立って、スクラップを進めるとはどういうことか。

発表者 本校は子どもの活動が飽和状態になっているので、ひとつでも減らすことで、子どもの負担を軽減し精神的余裕を持たせたいということである。

田中 地域性を生かした活動であることがよく伝わってきた。小浜市が推進している3S学習を行っている6年生は、自治性の高い学級集団であるからこそ、主体的で対話的な深い学びが実現できている。この3S学習を小学校の発達段階に応じてどのように指導しているのか。また、3S学習を中学校にどうつなげているのか。

発表者 当然1年生から主体的に学ぶ姿勢は実についていない。そこで、年に数回、低学年の児童が上級生の授業を参観する場を設けている。また、担任で低中高の部会を作り、相談連絡を取り合っている。3S学習は小浜市のすべての小中学校で取り組んでいる。しかし、中学校では授業内容から考えて、小学校高学年ほど徹底して3S学習のスタイルを取り入れることは難しい状況である。ただ、そのような状況の中にある中学校でも、がんばって3S学習を推進している。

田中 上級生の授業をモデルにしながら主体的な学習のできる集団へと成長しているということですね。

小林 発表のあった内外海小学校と同様に、どの

学校においても学校で取り組んでいる活動が多すぎることで飽和状態になっており、スクラップアンドビルドなどの変革を行っている。内外海小学校において、そのような変革・改革をする中で、苦勞されたところについて、もう少し詳しく教えてほしい。

発表者 ここ数年、小浜市より受けていた他市町の子ども会と本校の6年生が交流する事業を、市教委や市担当課と折衝を何度も繰り返すことで、本校の負担を減らす方向に改善した。また、毎年実施していたPTA主催のバザーを取りやめた。このように、少しずつでも児童の負担を軽減するよう努力している。



◎グループ協議内容

【社会形成能力を育むための校長のリーダー性】

- ・地域とのかかわりが欠かせない中で、校長が地域の関係団体の会議にできるだけ参加し、互いに協力し合えることを話し合っただけで信頼関係を気づくことが大切である。
- ・子どもに職業の意義を話し合わせる大切である。その中でいろいろな価値観を知ることも必要である。
- ・子どもたちが地域を好きになる。そして、地域の人に子どもの中に入ってもらう、地域に発信する力をつけさせたい。それを社会形成能力と考えている。学校と地域をつないでいる役割を校長が担っている。
- ・多忙化解消のため、なくすこともあるが、何が必要なのかも考えなければいけない。カリキュラムマネジメントの大切などである。

(文責：小浜市立宮川小学校 前田 良則)

第7分科会 — 自立と共生 —

研究課題

自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

研究発表題

互いに認め合い、自立できる子どもの育成を進めるための校長の役割

福井市長橋小学校長 原 稔

I 研究の視点

教育の目的は、社会の形成者として必要な資質を備えた人間の育成である。自分に降りかかる課題に対して、人任せではなく自分自身で主体的に解決することや、他者と協力しながら課題の解決を進めていく力は社会の形成者として極めて大切な資質である。

しかし、児童を主体的・協働的に活動させることは簡単なことではない。そこで、このような資質・能力・態度を公立の小学校で育むために、校長としてどのような働きかけができるのかを実践・検証してみたい。

II 研究の概要

(1) 勤務校の実態調査

- 前年度の学校評価
- 児童アンケートの分析

(2) 職員へのアンケート

- 児童をより主体的に活動させる場面の設定
- 児童をより仲良くさせる工夫

(3) アンケートを基にした実践例

- 委員会活動の改善
 - <図書委員会>
 - ・児童による読み聞かせ会の実施
 - ・本の福袋コーナーの設置
 - <生活委員会>
 - ・挨拶キャラクターの募集・投票
 - ・キャラクターを用いた挨拶運動
- 合同授業の工夫
 - ・近隣4校のへき地校が合同で年間3回（6月、11月、1月）の合同授業を実施しているものの、内容が講師を招いてのダンスやゲーム、百人一首など児童が受け身になる授業が多かった。
 - ・児童が主体的に協働できるように、「計画」「準備」「実践」「振り返り」を児童の手に委ねる授業を助言した。

- ・高学年で「交流会を開こう」中学年で「ハローワールド」など児童主体の実践が行われた。

(4) 校内研修の実施

- 児童が自主的に、しかも協働して取り組める実践を進める中で、級友との協調が苦手で、何かとトラブルを起こし担任が手を焼くグレーゾーンの児童がいた。そこで、夏季休業中に特別支援教育の現職教育を実施した。

○研修内容

- ・困った行動の類型化
- ・感覚、認知、行動、の各段階での対応
- ・活動の中に「ドーパミン」の分泌を促す、「目的」「見通し」「動き・作業」「変化」「高得点」があるかを確認
- ・「共感」を大切にすることが言いなりにならない。主導権を渡さない。

III まとめ

(1) 成果

- 学校での教育活動はともすれば前年度踏襲となり、実施の目的やねらいを見失いがちである。しかし、「自立と共生」という視点を持ち、今、行っている教育活動を見直すことで、様々な改善点を見出すことができた。
- 児童会活動や学校行事等で、児童の発想を活かし主体的に進める活動が生まれ、学校運営の活性化に繋がった。
- 特別支援教育に関する指導や支援の在り方について、職員の共通理解を図ることができ、問題のある児童の成長に役立った。

(2) 課題

- 地域の「子ども会育成会」でも子どもの自立を重視した活動を行っている。PTCA等を活用して互いに情報を交換し、連携を密にすることでさらに効果を深めることが期待できる。

◎研究協議内容

提案者の変更により、質疑応答・研究協議を行うことができなかった。そこで、4グループの協議内容を、記録用紙をもとにまとめることとした。

グループ協議の内容は、第7分科会「自立と共生」研究課題：「自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進」とは結びつかない面があり、学校間の情報交換が主なものとなった。



◎グループ討議内容

Aグループ

「学校経営に関して」

- ・校長としてのリーダー性が大切。
- ・職員がチャレンジしやすい環境づくりが大切。
- ・いろんな手立てを使って、外部機関と連携することが大切。
- ・保護者からの連絡はしっかり聞いて、保護者の立場に立つことが大切。
- ・その場に応じたキーワードを管理職が発信する。
- ・子ども達はもちろんだが、職員も含め、全校でソーシャルトレーニングを行っている。
- ・人事構想が大切。
- ・教育総合研究所のサポートの積極活用。

Bグループ

「特別支援教育について」

- ・特別支援教育は、学校経営上、とても大切なウエイトを占めている。
- ・特別支援学級に入級させるのが難しい。
- ・専門機関を受診してもらい、診断を受ける

ことが大切。

- ・特別支援教育センターでの相談もよい。
- ・義務制の特別支援学校免許を持った教員が少ない。
- ・特別支援学級担任のスキル向上が必要。

Cグループ

「学校状況に関する情報交換」

○ふるさと学習について

- ・コウノトリ学習
白山小学校で実施
- ・地域の特性を生かす取り組み
吉川小学校：なす収穫祭
白山小学校：白山スイカ コウノトリ米
越廼小学校：定置網漁業見学 わかめ採り
宮崎小学校：トマト農家訪問
大安寺小学校：大安禅寺訪問
本庄小学校：統合2年目なので地域を知ることから学習を始めている。

○小規模校合同授業について

- 福井市海岸部4校で実施。年3回低・中・高学年別に各校に集まり、合同で授業を実施。市バスを利用し、費用はなし。交流学習は遠隔システムを利用するのもよい。修学旅行を合同で行っている学校もある。

○統廃合について

- 待ったなしだと思うが、地域性があり難しい問題である。

Dグループ

「子どもの自立を図る

特別支援教育の推進について」

- ・視力障害児：4年生まで通常学級に在籍。安全面を考慮し、保護者の同意を得て特別支援学級へ入級。
- ・感情が高ぶる児童：保護者の要望により通常学級に在籍。休み時間は支援員が付き添っている。
- ・養護教諭が、コーディネーターとして、職員会議後や日々の終礼等で情報交換をよく行っている。

(文責：福井市越廼小学校 菅野 博)

第8分科会 — 連携・接続 —

研究課題

家庭・地域・異校種との連携・接続の推進

研究発表題

地域の特性や課題に目を向け、ふるさとに根ざした特色ある学校づくりを進める上で、校長としてのリーダーシップをどのように発揮していくか

大野市乾側小学校長 大塚 俊 浩

I 研究の視点

大野市内には、10の小学校がある。どの学校においても、地域の課題や特色に目を向けながら「ふるさとを誇りに思う児童の育成」に取り組んでいる。新規事業の立ち上げや既存事業の継続の中で、校長がどのように関わって、リーダーシップを発揮して地域連携を進めているのかを探る。

II 研究の概要

各学校で行われている地域連携事業の中から、新規事業の立ち上げ2例と既存事業1例を取り上げる。

(1) 新規事業の立ち上げ(2例)

- ① A小学校4年生：校区の寺町（観光地）にあるお寺の秘密を探り、観光大使として、観光客に魅力を伝える事例

【学校経営ビジョン】

《ふるさと大野、母校が大好きな子を育てる》

A 事業を始める前年

- ・校内で事業提案（担任・運営委員会や職員会議）
- ・PTA役員会へ協力依頼

イ 実施年度

- ・関係団体長・公的機関への趣旨説明と協力依頼、対象となるお寺との日程調整、調査時の付き添い依頼、観光ボランティアへ講師の依頼、当日の計画作成など、窓口として動く

- ② B小学校5・6年生：地区の夏祭りの復活を機に、夏祭りを盛り上げようとした事例

【学校経営ビジョン】

《地域を愛し、地域から愛される子の育成》

実施年度

- ・校内で事業提案（担任・運営委員会や職員会議）

- ・地区の公民館長、夏祭り実行委員長へ協力依頼
- ・担任を通じて、児童に企画内容の検討を依頼
- ・夏祭り実行委員会で、企画内容説明
- ・学校便りで参加の呼びかけ、当日は準備・後片づけ、記録写真撮影、後日学校便りで発信

(2) 継続事業の融合(1例)

- ① C小学校全校：地域行事（公民館主催）と学校行事を融合させて、2週で開催されていたものを1週で開催する事例

【学校経営ビジョン】

《ふるさとを大切にすいふりっ子の育成》

A 事業を始める前年

- ・地区の公民館長に、公民館事業と学校行事の融合を打診→地域の各会合で話し合われる
- ・地域の会合に出向き、合同開催を依頼
- ・PTA役員への協力依頼

イ 実施年度 現在合同開催に向けて進行中

III まとめ

校長のリーダーシップ

- (1) 学校経営ビジョンにおける明確な位置づけ
- (2) 関係団体や機関等との双方向的な連携づくり
- (3) 立ち上げた1年目は校長が窓口
- (4) 日頃からの関係団体との連携、信頼関係の構築
- (5) 地域と学校の新しい協力のあり方の模索
- (6) 目的達成のための予算化

【成果】校長が自ら動くことによる信頼や協力の得やすさ、新しい地域学習の広がりへの提示

【課題】事業実施日が、週休日になることが多く、職員の勤務態様が課題である。また、事業予算をどう組むかも今後の課題である。

◎研究協議内容

百田 B校で、夏祭りに取り組むことへの紹介があったが、祭りが終わるのは8月中旬である。それまで、この祭りのことが教職員の心の負担にはなっていないのか。

発表者 祭り前日を児童の登校日として、最終の準備の日をしている。また、1学期末にも準備の時間をとっているため、教職員の負担はあまりないように感じている。

内藤 学力調査等との関係、保幼小の連携、生活科や総合的な学習とのかかわりの中で、子どもはどうなっているのか、学びは大切にすることはできているのかが気になってくる。子どもたちに調べさせて、課題を見つけていくことが本来なのではないか。そして、活動の中で光る子どもの様子を担任に伝えていくのが、校長の仕事なのではないか。「地域と進める体験推進事業」など、校長がせざるを得ないことはあるが、評価はどうしていくのか、本当に成果はあるのか、スクールプランとの整合性はあるのか、課題は何か、校長のカリキュラムマネジメントが問われている。

発表者 子どもの思考の流れも視点に入れておくことは必要である。夏祭りの取り組みに関して言えば、子どもたちは地域のために役立っていることを素直に喜んでいる。計画したことについては、子ども主体で取り組んでいる。何年か先に自分の地域をどのように見ているかが大事ではないか。連携行事については、学校評価に加えて回答してもらっている。昨年度は地域行事の評価は大変良かった。家庭・地域・学校協議会での評価も高かった。学習との関連をきちんとさせることは重要である。

松本 本校は「地域と進める体験推進事業」の1年目である。地域コーディネーターはどのようにしているのか。また、その方々は総合的な学習の時間にもかかわっているのか。

発表者 公民館長、地域をよくする会会長、民生児童委員（地域ボランティア）で、窓口は教頭である。いずれも、家庭・地域・学校協議会委員も兼ねており、話は進めやすい。児童とのかかわりは放課後である。授業ではない。

岡崎 ふるさとを愛するがためのいろいろな事業だが、苦しくなっている部分もある。行事を融合したことによるデメリットはないのか。

発表者 まだ実施していないので成果についてはわからないが、新しいことであるだけに、保護者からは不安の声も聞かれた。しかし、公民館関係者からは理解の声もあり、少しずつ今年の祭りについてのイメージができつつある。正直、昨年度のままにしておけば良かったと思わないでもなかったが、職員の働き方改革のための提案でもあり、公民館関係者も多くの方々を集められるのではないかと期待もしている。いろんな声はあるが、実施に向けて計画的にすすめていきたい。

内藤 地域行事に協力してくださるボランティアの方々の保険などはどうしているのか。

発表者 大野市教育委員会からの予算でボランティア保険に加入している。



◎グループ協議内容

- ・小規模校の場合、地域が大変協力的である。しかし、このままでよいのか、さらなる積極的なかかわりが必要なのか。また、地域との連携行事は減らすことが難しい。ここまではできるが、これ以上はできないということ地域に伝えていくことも校長の仕事である。
- ・無理なく事業を継続できるような工夫が必要である。役割分担を考えていかなければならない。
- ・地域には、子どもの学習に役立てることのできる素材がたくさんある。どのように生かしていくか、教職員の意欲や連携の充実にかかっている。
- ・児童の出入りや、外国籍の児童が多いなど、学校として一体化して実行することが難しい場合もある。
- ・地域連携行事では、子どもの主体的な活動が組み立てにくいこともある。学校として主体的にかかわっていくことを意識しなくてはならない。

（文責：大野市小山小学校 前田満里子）

福井県小学校長教育研究大会 主題・副題一覧表

年度	大会 主 題 (副 題)	開 催 地
55	世界から信頼される誠意と信念に満ちた日本人の育成 (新教育課程のめざす豊かな人間性の追求)	東海・北陸 福井大会
56	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (創意ある教育経営の実践)	大 野 市
57	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (意欲あふれる小学校教育の創造)	武 生 市
58	人間性豊かな児童の育成をめざす教育の創造 (教育経営理念に立つ自校の教育構想と展開)	小 浜 市
59	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	鯖 江 市
60	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	坂 井 郡
61	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	敦 賀 市
62	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく生き抜く子どもの育成)	東海・北陸 福井大会
63	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (厳しく自己確立をめざす子どもの育成)	勝 山 市
平元	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (信頼と愛情につながる育成を求めて)	大 野 市
2	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子の育成)	武 生 市
3	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (世界をみつめ、広い心をもつ実践力のある児童の育成)	小 浜 市
4	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学ぶ意欲とたくましい実践力のある児童の育成)	鯖 江 市
5	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子どもの育成)	坂 井 郡
6	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (豊かな心を培い、たくましく生きる子どもの育成)	福 井 市
7	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自己確立できる人間を育てる学校像の創造と具現)	敦 賀 市
8	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自ら考え、主体的に判断し、心豊かでたくましく行動できる児童)	勝 山 市
9	第 49 回全国連合小学校長会研究協議会 第 32 回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会	福 井 市
10	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自ら生きる力を切り拓き、21 世紀にはばたく子どもの育成)	武 生 市
11	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (個性を尊重し合い、豊かな自己実現を目指す児童の育成)	小 浜 市
12	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と自己実現を目指す確かな力をもつ子どもの育成)	鯖 江 市

年度	大会主題(副題)	開催地
13	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな感性と確かな知性をはぐくむ学校経営を目指して)	坂井郡
14	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな力を持ち、共生社会を生きる児童の育成)	大野市
15	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心とかかわる力を持ち、共に生きる児童の育成)	三方郡
16	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と自ら学び続ける力を持ち、たくましく生きる子供の育成)	東海・北陸 福井大会
17	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心とたくましく生き抜く力を持ち、共に歩む子供の育成)	武生市
18	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力をもち、たくましく生き抜いて自己実現を図る子どもの育成)	高浜町
19	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力をもち、健やかでたくましく生き抜く子どもの育成)	鯖江市
20	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (確かな学力をもち、心豊かにたくましく生きる子どもの育成)	坂井地区
21	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力をもち、自立と共生を目指す子どもの育成)	勝山市
22	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力をもち、未来を拓く子どもの育成)	敦賀市
23	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢をもってたくましく生きる児童の育成)	東海・北陸 福井大会
24	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて挑戦する子どもの育成)	越前市
25	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	若狭町
26	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	越前町
27	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	坂井市
28	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	大野市
29	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	敦賀市
30	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成)	越前市

あ と が き

9月29日に、第73回国民体育大会「福井しあわせ元気国体」総合開会式が、福井県営陸上競技場で開催されました。あいにくの雨の中、各都道府県選手・役員3,732人、歓迎県民イベント2,746人、式典演技2,090人をはじめ、観客も含めると約2万5千人が参加して行われました。私も観客席で、午前11時から午後4時まで、約5時間見ていましたが、ずっと雨が降り続いていました。雨合羽を着ていましたが、上から下まですぶ濡れになりました。1時間に8ミリ、9ミリの大雨でした。あれだけの長時間、雨の中を座って見ていることは、初めての経験でしたが、とても感動しました。

次の日の新聞に、式典総合プロデューサーの山根一真さんの言葉が載っていました。「あれだけの雨をはね飛ばすような素晴らしい演技を見せてくれた。これが福井の今であり、未来であり、次の時代をつくっていく力だ。」「寒くてお尻までびちょびちょだけれど、心は熱かった。子どもから大人まで全員が雨に打たれながらも全くおれずにビシッと決めてくれ、お客さんも長時間見守ってくれた。感動して泣いてしまった。」と福井県民の粘り強さを絶賛していました。また、ゲスト司会の俳優の津田寛治さんも「出演者の一糸乱れぬ演技に一人一人の人間力を感じ、大会を成功させるんだという思いが伝わってきた。雨の中、演者と観客が一体となった光景に涙をこらえるのに必死でした。」と話していました。雨は降りましたが、かえってあの雨の中で2万5千人が頑張った感動の開会式になりました。

私がとくに感動したのは、最後のハピネスダンスです。2,300人が、あの雨の中、「笑顔」で楽しく元気に踊っていた姿です。力いっぱい拍手をしました。「笑顔」には、みんなを幸せにする力があると改めて感じました。

第70回福井県小学校長教育研究南越大会が、福井県教育委員会教育長 東村 健治様、越前市長 奈良 俊幸様をはじめ、多数のご来賓をお迎えして、越前市文化センターを主会場に盛大に開催されました。

学校教育がどの方向に向かって突き進むのか、その羅針盤を定めるのは校長のリーダーシップそのものです。8つの分科会に分かれ、校長自らが本音で実践を語り合い、学校現場の直面する課題に正対できたことは、大変意義深く大きな成果でした。

南越大会の成果を収録した本研究紀要をご一読いただき、今後の本県の小学校教育推進の一助としていただければ幸いに存じます。本大会において、貴重な提案発表をしていただいた各ブロックの校長先生方、そして、記録・編集等の任に当たられました関係各位のご苦勞に対しまして深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会のために、物心両面にわたりご指導・ご支援をいただきました福井県教育委員会、越前市、池田町、南越前町、並びに周到な準備・円滑な運営に誠心誠意ご尽力いただきました南越地区の校長先生方に、衷心より感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。ありがとうございました。

福井県小学校長教育研究委員長
越前市北日野小学校長

品 川 満